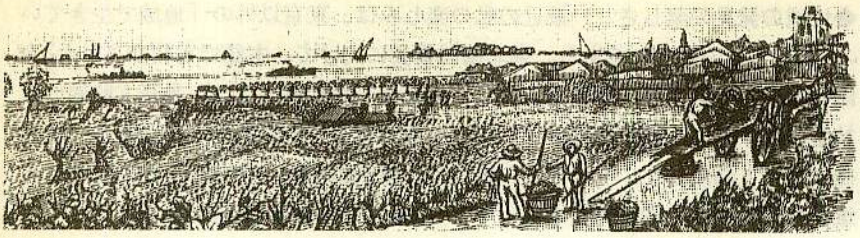

農村ワ

労働者協同組合と農村型ワーカーズ・コープ

石見　尚（東京都／日本ルネッサンス研究所）

日本はワーカーズ・コープの発展国である

ワーカーズ・コープについて厳密な規定をすることは避けて、組合員が労働・所有・経営する生産・サービスの協同組合（法制化されているか否かは別として実態的にみて協同組合方式を採用しているものをいう）をワーカーズ・コープ（コレクティブ）として概念規定すると、日本には多様多様な業種にわたってワーカーズ・コープがすでに形成されている。既存の統計や各種の報告からわかっている組織状況をみよう。

法人格をもつもの（1993年現在）

農事組合法人　6,694組合

企業組合　2,337組合

法制化を運動中のもの

日本労働者協同組合連合会系　72

ワーカーズコレクティブ・ネットワーク・ジャパン系　152

計　9,255

備考　日本労働者協同組合連合会の年次は1995年による。

これらの日本の代表的なワーカーズ・コープはどれほどの組合員と事業高を擁しているか、公表している日本労働者協同組合連合会（労協連）と、ワーカーズコレクティブ・ネットワーク・ジャパン（W．N．J．）の資料によって推測しよう。

	組合数	組合員数(人)	事業高(億円)
労協連	72	6,883	59
W.N.J.	152	4,285	22
1組合平均		50	0.36

これによると1組合の平均組合員は50人で年間3,600万円の事業高をあげている。1組合の組合員が50人と多いのは、労協連が受託労働組織がいまのところ多いからである。この傾向はW．N．J．においても見られる。生協配送センターの請負作業をワーコレの生産・サービス事業では、普通、1組合の組合員規模は7～20人、平均して15人程度である。

農事組合法人と企業組合のように生産・サービス事業を行なうものでは、1組合の平均組合員数7人程度、非組合員従事者2人程度である。そして1組合平均の事業高は5,000万円程度であろう。これは私の推測であって、課税資料となるものではないことを断わっておく。これによって農事組合法人と企業組合の組合員数と事業高を推測すると、

ーカーズ・コープの波

	組合員数(人)	事業高(億円)
農事組合法人	46,858	3,347
企業組合	16,369	1,168
計	63,227	4,515

以上、合計すると、日本のワーカーズ・コープは1993年現在で、組合数が9,255、組合員数74,395人（ほかに非組合員従事者22,320人）、事業高約4,600億円という概数になる。

上にあげたワーカーズ・コープ組織のほかに、事業と組織の実態はワーカーズ・コープとほとんど変わらないが、農村女性の生活改善グループや農協婦人部の味噌や漬け物、菓子、ジュースなどの食品加工、朝市、レストランの経営、羊毛の加工のように任意団体で独自に活動しているものがある。これはW．N．J．のワーコレと活動形態が類似している。自家製原料を持ち寄ることができる点と敷地・設備が安く入手できる点で大都市のワーコレよりも条件が恵まれている。農水省の1994年のアンケート調査によれば、これらのグループ組織の数は1,255にのぼっている（平成7年「農業白書」）。これを加えると、日本のワーカーズ・コープの数は10,500にも達している。

ワーカーズ・コープが発達していると言われるヨーロッパ諸国の場合は，以下のとうりである。

	組合数	従業員数
イギリス	1,500	11,000
フランス	1,330	32,200
スペイン	13,100	72,000
イタリア	21,000	373,000
ドイツ	6,500	150,000
オランダ	300	5,000

備考　冨田賢治ほか「労働者協同組合の新地平」36頁による。

日本はイタリアには及ばないが、スペインと同水準にあるかこれに近い数である。日本はまさにワーカーズ・コープ「大国」なのである。この事実は日本のわれわれがまず認識を新たにすべきことである。それだけにワーカーズ・コープの法制が不備であるという後進性が目立つのである。

日本人の労働観からの出発

さて、日本がワーカーズ・コープ「大国」であるのは農村が主流であって、なぜ都市ではワーカーズ・コープは日本人のなかでポピュラーにならないのであろうか。この点はとくに欧米イデオロギーによる日本の都市型のワーカーズ・コープの検討課題である。その原因をたしかめることは、労協連とW．N．J．にとっても他人ごとではないはずである。

これらの都市型ワーカーズ・コープが大衆化しない理由は、いくつか錯綜した事情がある。法制化されていないことも大きな原因である。都市勤労者・市民が主体であるため、高い地価や、業界で既に根を張った団体や業者との競争、少ない資金力で新しい事業を開拓することのきびしさも原因の一つである。

労協連とW．N．J．に共通している言えることであるが、その内容は違うが、どちらも理屈先行的性格が強い点も大衆性に欠ける理由ではないかと思う。ワーカーズ・コープは理論闘争が目的ではない。また学者、研究者のように学説実証を目的とするものでもない。もちろん思想をもつことは良いし、自己主張をすることは良いことである。しかしワーカーズ・コープはその思想や自己主張を自分たちの事業成果を通じて表現するのであって、理論闘争によって自己表現するためのも

のではない。画家や音楽家が言論で自己表現するのではなく、あくまでも画面でまた音やメロディーで自己表現するのと同じことである。また経済人にとってすべてが経済業績で評価されるのと同じである。

こう考えると、日本では都市型ワーカーズ・コープのかわりに、農村型の農事組合法人が多いのはなぜかという問題につきあたる。農事組合法人をもって日本のワーカーズ・コープの代表というつもりはないのであるが、その広い普及の理由を探ることは都市型ワーカーズ・コープの大衆化のために参考となることがあるかもしれない。

農事組合法人や農村の女性たちのワーコレの普及の第一の理由は、日本農村の協同の風土の上になり立っていることである。協同の風土とは現在では古い農村共同体を指すのではなく、農協の大型機械や施設の持つ生産力が個人農家を協同化にむかわせる可能性が拡がっているということである。農村には農地の私有財産制のしがらみをどう克服するかという厄介な問題があるが、それを乗り越えて共同化の可能性を実現に転化するのは、説得力のあるリーダーの存在によるのである。

第二の理由は、前にもふれたが、農村には用地や原料を入手しやすい条件があること。

第三の理由は、農村には農産加工の伝統技術があることである。もっとも伝統技術を越える高度技術の開発が新しい問題となっているのであるが。

こうした条件を満たす組合は、地域に根をおろした落ち着いた活動をしているので、敢えて理屈に走る必要もないのであろう。（もっとも、近年では必要なときは、理路整然と自己説明できる人材が農村ワーカーズ・コープのなかに出てきている。）

以上の三つの理由のほかに、農村型ワーカーズ・コープを成立させている基本的な要素は、日本的な人間関係である。その人間関係は意識や理屈の基層にある日本的労働観ないし農民的労働観にあるように思われる。この点は重要な論点なのでやや立ち入った検討をしてみたい。

農家の人々が生産協同組合をつくるのは、もちろん労働によって生活のためのカネを得たいという願望が基本的な動機になっている。ただカネを得るという目的ならば、企業に雇われて賃金労働をするほうが手とり早いのであるが、敢えて生産協同組合をつくろうとするのは、経済的動機のほかになにか社会的動機があるのである。

人によって多少の個人差はあるが、共通しているのは、

①家の維持や家庭生活と両立できる仕事を選びたい

②農地をはじめ地域の資源を荒廃させたくない

③地域社会を維持するために地元で働く場を作りたい

ということであって、これらの動機が重なっている。つまり協同労働の動機には個人的な経済目的のほかに地域にまつわる社会的動機が認められる。

その結果、かれらの労働観には家族の生活のための労働のほかに、地域社会を大切にする価値が伴っており、意識すると否とを問わず、自分の労働を地域の人間とのつながりで考える習慣が身についている。だから「地域のみなさまのお陰でここまで来ることができた」という言葉が、生産・加工組合の人々の口から素直にでてくるのである。

実際、農村のワーカーズ・コープでは自分たちの利益のためだけでなく、グループ以外の地域のひとびととの利益を計る活動をしているし、地域の人々も村のワーカーズ・コープを支援している。その一例は天竜市の山村、熊地区の生活改善グループである。20人ほどの主婦グループが手打ちそばの店を自主経営しているが、その「かあさんの店」には村の年寄りの手作り品（手芸品、わら細工、薬草品など）を販売している。それは村の高齢者の生き甲斐になるからである。だから手打ちそばの原料は村の農家が総力をあげて、山の斜面の一坪にも栽培している。これが農村型ワーカーズ・コープというものである。

地域社会のためにという価値が組織づくりの一

つの基準になるから、組合加入が自然にしぼられるし、組合の運営の基本方針づくりと理事の選任も比較的スムースにおこなわれやすいのである。

都市型ワーカーズ・コープには、①の動機はあるが、②と③の動機はいくらか薄いのではないだろうか。W．N．J．のワーカーズ・コレクティブは都市型ではあるが、①の動機とともに②と③の動機を意識して活動している組織が多いことを付記しておかなければならない。

さてここで、イタリア、スペインがワーカーズ・コープ「大国」である理由について検討することは無駄ではないであろう。日本人の先入観からすれば、これらのラテン系の労働観は生活エンジョイを優先させるので、ワーカーズ・コープ「大国」になり得るはずがないと考えるのも無理がない。しかしさきの統計数字は事実を物語っている。これらの国がそうなった諸条件について全面的に検討する余裕がないのであるが、私の乏しい見聞からすれば、イタリア、スペインの社会にはラテン系特有の村落的市民社会が都市と農村の基底にある。モンドラゴン協同組合がその結合の精神的よりどころをバスクの農村コミュニティにおくと言っているのは、その一例であろう。バスクの村落と人々を知るには現地を見るのが一番であるが、できない人には俳優、緒形拳がバスクの山村集落に一年滞在した記録を見てほしい。人間的な温かみのあるバスクの村人との交流記録である。（注）

それもできない人には、スペイン村落の生活を感じる材料として、詩人J．R．ヒメネス著「プラテーロと私」を読むことをすすめたい（かれは1922年ノーベル文学賞を受賞した）。そこにはロバと人間、また村と人間の世界が感動的に描かれている。

日本の都市型ワーカーズ・コープが大衆性をもつためには、欧米のワーカーズ・コープを外見的に模倣するのではなく、まず日本の農村型ワーカーズ・コープを研究し、そこから現代ワーカーズ・コープの実践指針を引き出すことが一案である。そのため本号の特集では農事組合法人や任意団体のケース・スタディを試みた。事例の選択はまったくアット・ランダムであって、ことさら優良事例を選んだわけではない。農村型ワーカーズ・コープの長所短所をありのままに示す例と考えてもらえば結構であって、そこから何がしかの教訓がえられれば幸いである。

（注）民放で1988年秋～89年に撮影し、1989年放映された「虹の谷　風の林」。

場所はスペイン・ナバラ地方のウスタロス村（パンプローナから2時間）。羊と牛と林業の寒村。「バスク」とは山の人々の意味。仕事のない家族は都市に職を見つける。ウスタロス村では、厳しい自然の中で、人々は分かちあい共に生きている。頑固だがやさしく、また村に誇りをもって胸を張って生きているのがたまらないのだと緒形拳は言う。